投稿論文

明治初期民衆における天文観と天人唯一思想
――菅野八郎『真造辨　八老信演』について――

青野　誠

はじめに

本稿は菅野八郎（一八一三〈文化一〇〉～一八八八〈明治二一〉）によって一八八二（明治一五）年に執筆された『真造辨　八老信演』の分析を元にして、明治初期の民衆がいかなる天文観を有していたのかについて考察を加えるものである。特に、彼が文久期に烏伝神道の教祖である梅辻（賀茂）規清から受容した、陰陽説と天人唯一思想に着目しながら分析を行う。

彼は、奥州伊達郡金原田村出身の百姓でありながら、東照大神君の使いに神託を受けるという霊夢によって政治運動を展開した(1)。そうした動きが幕府より危険視されたこともあり、安政の大獄に連座し八丈島へと遠流となった。のちに帰郷するが、一八六六（慶応二）年に発生した信達騒動の頭取の嫌疑をかけられ、同時代の人々から「世直し大明神」とみなされた。こうした経歴に加え、明治期にはほとんど著作を残していないこともあり、八郎に関する従来の研究(2)は嘉永から慶応の幕末期の分析に集中しており、明治期への言及は圧倒的に少ない。そこで、彼の晩年における思想形成の到達点と歴史的位置をより明確にすることが本稿の第一の目的である。

また、幕末維新期における天文説は、大きく二つに分けられる。すなわち西洋天文説と、須弥山説をはじめとする旧来の天文説である。前者ははじめ蘭学者らによって広められ、明治期には広く承認された。後者は西洋天文説の流入に危機感を抱いた人々―仏僧など―による、旧来の世界観を守るための対抗運動という側面があった。幕末維新期とは、主体としての人間が自らの外部にある客体的自然を認識しているという世界観と、人間と天地自然を貫く絶対的な「理」の存在を認める世界観の、二つの異なる「自然」認識の衝突と融合の時代だったのである。そして、天文観に関する先行研究の多くは一部の知識人間の論争に着目してなされてきた(3)が、民衆がこうした天文諸説をいかに認識・受容したか、つまり「自然」をどう認識し、「自然」に相対する自己をどのように認識していたかについては、ほとんど触れられてこなかった(4)。八郎の

事例を元に、この一端を明らかにすることが第二の目的である。

本論に入る前に、まず『真造辨　八老信演』の史料的性格について概要を確認しておく。本書は一八八二（明治一五）年に執筆された。原本は不明だが、福島県伊達市にて個人蔵の写しが存在することが確認されている。現在、伊達市保原歴史文化資料館にこの写しを模写したものが保存されており、本稿ではこれを底本とした。末尾に「明治十七年春八郎寄リ写置者　伊達柱田　柳沼長五郎　持主」の記載がある。全七二帖で、前半部「真造辨　八老信演」（以下「真造辨」と表記）では天文の「真理」と「造理」について論じており（二八帖途中まで）、後半部「夢之浮言」では八郎が夢で見た物語として、「開化」の名のもとに利己主義的な政治を行う明治政府に対する批判が展開されている。だが、伊達市には「夢之浮言」のみの写しも存在することが確認できており、元来は別個だったものを一冊にまとめた可能性がある。

本書に言及した研究はいくつか存在する(5)が、それらは「夢之浮言」の分析に重きを置いており、「真造辨」に関しての分析は十分とは言い難い。よって本稿での分析は、この前半部を中心に行う。それにより八郎がなにを根拠に政府批判をしたのかも、より明らかにしうるだろう。

一、諸説に対する八郎の評価

そもそも「真造辨」はいかなる目的で執筆されたのであろうか。同書の序文には以下のように記されている。

抑此書ハ智者学者ノ言語ヲ聞溜、私老（考カ）ヲ加ヘ、虚実真造ヲ探リ、是レヲ辨別シテ愚ガ一生涯ノ楽ミトス。其事物数多ク筆紙ニ尽シ難シト雖モ、公、我レニ紙ヲ与ヘテ書キ残セト云フ。愚老元来無学悪筆、其上今七十歳ニシテ眼目陰リ、星明リニ似テ命毛ノ落着処ヲ知ラズ。手探リ書ニ千ノ一ヲ尤（ほぼ）ニ記スハ恥ヲ残スニ似タレトモ、真理ヲ吐ニハ文筆ノ拙キヲ恥ツルコト有マジト、漢語、和語、古語、新語、俗語、国ナマリ混交シ、唯能幼童ノ胞中ニ入ル事ヲ希而已。(6)

これによれば、八郎はこれまで見聞した知識を書き残すように請われ、世間の「智者学者」の「虚実真造」を明らかにするために執筆したという。「公」が誰を指しているかは不明だが、「幼童ノ胞中ニ入ル」ことを意図していること、また、同書を含む八郎の著作が近隣住民の所蔵品として残されていることからも、彼に近しい周囲の人物の依頼を受けて、人々を啓発する目的で執筆されたものだと考えられる。

同書は天文諸説を紹介した上で、それに対する自身の見解を述べ、それらを踏まえて自身の天文観を論じるという形式で構成されている。ここではまず、八郎が諸説に対していかなる評価を下しているのかについて分析する。これは彼の立場を明らかにするのみならず、賛成にしろ反対にしろ、民間社会にいかなる天文知識が普及していたのかを測る一つの尺度とすることができよう。なお、諸説の掲載順は同書掲載の通りとする。

①キリスト教天文説

まず本書で言及がなされるのは、キリスト教天文説である。かつて八郎は、一八六二（文久二）年の家族への書簡(7)のなかで、キリスト教は「南蛮」が「日本を奪取ん」とするための手段であり、言葉巧みに「諸人の心を惑」すものだと危険視していた。それを踏まえて以下の記述を考察したい。

偖先ツ一説ニ、テウスト申シ奉ル仏アリテ天地未タ開ケザルヲ天地ト分ケ玉ヒ、夫レヨリ月（日カ）輪ヲ拵ヒ、世界ヲ明ニスト云フ。私ニ云フ。是等ハ耶蘇（ヤソ）ノ仏法方便説ニシテ、其尽開見スル則ハ取ニ足ラザ

ル論ナレドモ、其道ニ入深考アラハ、真理ニ可フコト有ルヘキナレ共、我其道ニ入ラザレバ知ラズ。故ニ方便説トシテ楽シマズ。

ここではキリスト教における天地創造に言及され、「テウス」によって太陽が創り出されたという説が紹介されたうえで、これは「方便説」にして取るに足らないものだとされる。しかし注目すべきは、「其道ニ入深考アラハ、真理ニ可フ」こともあると説かれている点である。つまり、自身はキリスト教徒ではないためそうした天文観を受容することはできないが、信者にとってはそれが「真理」だと一定の理解を示しているのである。彼はこの時点でキリスト教自体を全面否定しているのではない。

さらに別の箇所では、天地の論にはいずれも「理」があるが、それらは「真理」や「造理」など様々である。それは「甘味」と言っても、「砂糖ノ甘味」と「カンザウ（＝甘草：青野註）ノ甘味」は異なるのと同じことだと説明がなされる。彼はここで様々な「理」の存在を容認する一方で、「真理」の存在を認識しているのである。

②望遠鏡の説

続いて望遠鏡の観測によって導かれた説に言及される。

望遠鏡ノ説、月星トモ悉ク世界ナリ。月ノ世界ハ近キユヘニ山海トモ明ラカニ見ヘ、月界冬ニ至レハ山々ニ雪ノ積リシ、近能見ユルナリ。星界ハ遠キユエ山海ノ有様ハ見定メ難シト雖、肉眼ニテ月ヲ見ル如ク星中ニ種々ノ曇リアリ。此雲リハ陸地ニシテ光ル処ハ海ナリ。月界ニ同ジ。亦月（日カ）輪ヲ見ルニ火炎十方ヘ立昇ル、一ツノ大丸ナリト云云。

私ニ云。是真理ニシテ、歳経ルトモ変ズル事有マジ。往古ハ器ナキユヘ、月星ノ実体ヲ知ラザリシシガ、初メテ望遠鏡ノ説ニ寄リテ天地ノ有様ヲ明悟シテ大悦。

月も星も、地球と同様の「理」を有する「世界」であると認識され、両者ともに陸と海(8)が存在していることが指摘されている。こうした観測によって得られた「天地ノ有様」こそが「真理」であり、古くはそれを確かめる術がなかったが、望遠鏡の出現によってこれが明らかになったのだと説明される。

ここでは一見、八郎は望遠鏡による天体観測の結果から「真理」を導き出すという帰納的な立場に立っているように見える。かつて庄司吉之助は、望遠鏡への言及を「自然科学的な知識を媒介とした八郎の真理を追究する精神」であると評価していた(9)。しかし八郎が有していた望遠鏡に関する説は一つではなかった。

③『星学図説』における大千里鏡の説

次に言及されるのは『星学図説』(10)である。同書は旗本・神田孝平（一八三〇〈天保元〉～一八九八〈明治三一〉）によって翻訳され、一八七一（明治四）年、東京紀伊国屋源兵衛によって出版された。その序によれば「此書ノ原本ハ「イルリュストレーテット・アストロノミイ(11)」ト題シ米国学士士覚士（スミット）ト云人、小学校教導ノ為ニ著シテ去ル慶応三年ニ刊行セル者ナリ。」「此書ノ主意専ラ初学ノ士ニ星学ノ大綱ヲ知ラシムルニ在リ」とあり、初学者向けに天文学の基礎的知識について問答形式で記したものである。

『星学図説』のなかで特に八郎が言及するのは、「大千里鏡」すなわち引き続き望遠鏡による観測についてである。

星学図説ニ曰、今、大千里鏡ヲ以テ天ヲ見ルニ、月星共世界ナレトモ、月界ハ海ナシ。故ニ我地球ノ如キ人間ハ生シ有マシ。亦、星中ニ色々ノ曇リアリ。月（日カ）輪ハ光気ニシテ中心ハ黒班ナリ。是レヲ図

シテ曰、光気大陽ノ実体ヲ包ム。光気ノ切間アリテ、中心見ユル表面ニモ黒斑アリト云云。

私ニ云。昔ノ望遠鏡モ今ノ大千里鏡モ遠キヲ見ルノ器械ニテ、二ツハ有マシ。然レトモ見ル人ノ心力ニ強弱アリ。亦、眼力ノ強弱アリテ大ニ違フナリ。月星トモ世界ナリト見定メタルハ両説違ハスト雖モ、大千里鏡ヲ見タル人ハ月ニ水ナシト云。甚タ理ニ違ヘリ。月ハ元来光リナク、日ノ光リ受テ輝クモノナリ。水ナクシテ何ニ央リテ光リヲ為サンヤ。必ズ是レハ心力眼力弱キ人ノ見誤リナリ。猶亦、古人ノ曰、月ハ水ノ玉、日ハ火ノ玉ナリ。鏡ニ央ツセバ忽チ物ニ火燃イ付、月ヲ央セバ水滴タル。水火ノ証是ナリト云云。亦、光気大陽ノ実体ヲ包ムト書シモ誤リナリ。尤、光気ハ火炎ノ未ナレバ、理ハ通ルナレトモ真理ニ遠シ。其ハ如何ント云フニ、日輪ハ凝リニ凝ツタル火炎ニシテ、近寄ルモノハ忽チ灰トナルヘシ。夫レヲ何ソヤ光気トハ心得難シ。世界明々タルヲ光気ト云フベシ。尤、日ノ中心黒斑ナリト云ハ面白シ。黒キハ則チ陰物ナリ。陰ニアラザレバ陽止ルコトナシ。然レトモ其中心、光気ノ切レ間ヨリ見タリト云モ不思議ナリ。日ハ車輪ノ如ク自転スルハ肉眼ニテモ能ク見ユルモノナリ。十方ヘ火炎立昇ルモノ車ノ軸ノ如ク自転スルニ、炎ノ切間有ルベキヨウナシ。是レモ必ズ心力眼力ノ弱キ人、目クロメキ見定メ難キヨリケ様ノ書誤リヲ書出シテ、多クノ人ヲ惑スナリ。由テ是レ等ハ惑説ニシテ真理ニアラズ。

『星学図説』によれば、月や星は「世界」であるが、月には海は存在せず、ゆえに人間は生じないという。また、太陽は中心が黒斑であり、それを「光気」が包んでいるのだと記述されている。ここでは先に見た②の望遠鏡の説が否定されているのである。

これに対して八郎は、異なる二説が存在する理由を観測者の「心力」「眼力」の強弱の差異に求めている。そして八郎が支持するのは②の望遠鏡の説である。なぜなら月は太陽光を受けて光って見えるのであり、水がなければ反射せず光って見えないはずだと主張する。そして古来から言われているように、月は水の玉ゆえに鏡を通せば水を生じ、太陽は火の玉ゆえに鏡を通せば火を生じる(12)という点に望遠鏡の説の根拠を求めている。

また、太陽の中心は黒斑でありそれを「光気」が包んでいるという説は、「理ハ通ル」が「真理」ではないという。太陽とは「凝リニ凝ツタル火炎」であり、それ自体が光を発しているのである。そしてそれは、十方へ火炎を吹き出しながら「車ノ軸ノ如ク自転スル」のであり、炎に切れ間が生じるはずはなく内部が見えるはずがないのだから、これは「惑説」だと批判が加えられる。

しかし、八郎はこの③の説を全面否定しているのではない。あくまで「理ハ通ル」のである。なぜなら「光気」は火炎から生じるものであり、そして黒色とはすなわち陰物であって、陰物がなければ陽が生じることはないからである。つまり八郎にとって「真理」か否かの判断基準は陰陽説に拠るものなのである。

彼は続けて次のように言う。

古人未タ明器ヲ得ザレハ、三光ノ実体知ラザレトモ月ハ水ノ玉、日ハ火ノ玉ト見定メタルハ、心力眼力ノ強キユヘ真理ニ可フ。今、大千里鏡ト云、明器ヲ得ナガラ月ヲ土玉ト見テハ昔ノ輩ニ猶及バス。

然ルヲ真事ト思ヒ、流行スル世ノ中ト成果シハ、人気衰ヒタルノ証ナリ。故ニ天動ノ真事ヲ用井ズ、地動ノ造理ヲ用井テ多ク人ヲ惑シ、其上、釈迦ノ偽リ者孔子ノ一ツテ者抔ト誹謗スル由、誠ニ勿体ナキ悪ロナリ。亦云、日輪ハ世界ヲ照ラス器械ナレハ尊敬スルコトナシ抔ト云者モ有ル。由イガニロアレハ迚何事ヲ云ゾヤ。釈迦ヤ孔子ハ

昔ノ大聖ニシテ、今時ノヘロ〳〵学者ノ類ニアラズ。信実心ヲ本トシテ人道ヲ建立シ、下愚ナル我等如キ迄、代々安楽ニ暮シ来ルモ辨（辨之）マヘズ。勿論日論（輪之）有レバコソ万物アリ。其身モアルニアラズヤ。然ルニ右ノ如クロカラ出次第ヲ云散シ、人気ヲ惑シ世ヲ晦（クラ）マス者ハ必魔ノ者ニテ、皇国ヲ魔国ニ為ント企ハタテシ者ナラン。

古人は天体観測をすることが不可能であっても「心力」や「眼力」が強かったゆえに「真理」を知っていた。それに対して、大千里鏡という技術を持ちながらそれを理解できないのは、「人気衰ヒタルノ証」だというのである。それゆえに地動説という「造理」が流布するのだと主張される。またここでは太陽を単なる「世界ヲ照ラス器械」とみなすことに強い抵抗が示されていることもわかる。

ここからは、八郎にとって「真理」とは陰陽説に基づくものであり、演繹的に導き出されていることが窺える。それに適合しないものは「心力」「眼力」が劣った人が唱える「造理」に過ぎないとみなされているのである。

④仏教天文説

さらに八郎は「釈氏」の説、すなわち仏教天文説を取り上げる。

釈氏ノ曰、天地ヲ須弥山（シミセン）ト号ケ、三十三天迄各付日、月、星、此山ノ腰ヲ旋リ玉フトアツテ、其山ノ図ハ元末太ク中細シト云云。私ニ云。是方便説ナレ共真理ニ可フ。天地ノ実体ハ円形ナリ。北極ヲ頭トシテ見ル則ハ、中太クシテ元スヘ細キ形也。其腰ヲ日、月、星旋ルナリ。中ノ太キモ中ノ細キモ算盤面ハ同ジナリ。釈迦ハ信実厚ク、万人ノ苦シミヲ助ケント日夜心力ヲ尽シ、女、童迄善道ヘ導クニハ方便説ニアラザレバ可ハジト、万事真理ハ内ニ含ミ、方便説ヲ表トシ女、童ニ安心サセントノテダテナリ。

須弥山説は「方便説」でありながらもある意味で「真理」であるとする。これは先に見たキリスト教と同様の評価であるが、その理由について、より詳細に説明がなされている。須弥山説は、天界と金輪を結ぶあいだに須弥山があり、その中腹を太陽と月が廻るという説である。こうした説は民間社会においても広く普及していた(13)。八郎は「天地ノ実体ハ円形」であるが、須弥山説は北極から見た場合、北極圏は細く、赤道付近は太く見え、さらにその周辺を太陽、月、星が周旋しているように見えることを表現しているのだと説明する。そしてこれは誤りではなく、釈迦が「女、童ニ安心サセン」ために意図的に用いた「方便説」であったとするのである(14)。

この後の部分では地獄や極楽の説を挙げており、須弥山説もこれらと同じく、人々に、娑婆をよりよく生きるため「孝」や「正直」を実行させるための「方便」なのだと説明がなされている。八郎にとっての「真理」が地球天動説であったことが読み取れよう。

さらに八郎はこうした仏教天文説の一つとして梵暦に言及し、佐田介石（一八一八〈文政元〉～一八八二〈明治一五〉）の説を取り上げる。彼は肥後国出身の真宗本願寺派の僧侶であり、学問修行のため京都の学林に上った際に、天龍寺の僧侶・環中（一七九〇〈寛政二〉～一八五九〈安政六〉）の下で天文学・易学を学ぶ機会を得た。『視実等象儀詳説』（一八八〇〈明治一三〉年）をはじめ天文学に関する書籍を多数執筆し、梵暦運動の中心を担った。一方で明治期には「ランプ亡国論」の名で知られる舶来品排斥運動を展開し、積極的に建白・結社など政治運動を展開した(15)。そうした行動が、当時の新聞などにもしばしば取り上げられていたことから、八郎がここで梵暦の代表例として取り上げたのだと推察できる。

佐田先生ノ曰、昔ヨリ天地ノ論多クシテ、大アリ。小アリ。円キア

リ。橢ツアリ。天動法アリ。地動法アリ。説々多キ其中ニ地動法ハ取ルニ足ラズ。実ハ天平地平ニシテ地ノ動カザルハ神曲ノ法ナリ。亦視実ノ両像アリ。暦家片時モ忘ルベカラズ。日、月、星ノ旋ハ平天ニシテ、遠天ニ旋転スル時肉眼届カズ。地下ヘ入ルト見ルハ間違ナリ。是則チ視高低ノ為ストコロナリト云云。

私ニ云。地ノ不動ト云ハ真理ナレトモ、天平地平ハ造理也。其レハ何故ト云ニ、月輪遠天ニ行シヲ地ニ入ルト見ルハ視高低ノ為ス処ナリト雖、是レカ実ナレハ朝ニハ日輪小サク見ヘ、次第々々ニ大キク見ヘ、亦入日ニモ其如ク遠クナルニ随ヒ、次第々々ニ小サクナリ星ヨリモ猶少サク見ヘテ、終ニ夜トナルヘキ定理ナルニ反テ、日ノ出日入ニハ大キク見ユルナリ。此所ヲ以テ深考スルニ、地下ヘ入ルガ真実ナリ。猶又視大小ノ言葉ニモ反セリ故ニ、天平地平ノ論、造理ナルコト目前ナレハ我レハ楽ミトセズ。

ここで説かれる介石の説こそ、視実等象論と呼ばれるものである。これは概略すれば、人々が肉眼で視ているのはドーム状の天空（視象天）であって、そのはるか上空に実際の天空（実象天）が存在しており、天体の動きを見ると地球地動説が正しいように感じるが、それは見かけ上の錯覚に過ぎず、実際は須弥山を中心とする円盤状の世界なのだという地平天動説である(16)。視実等象論は、西洋天文学に対して護法意識のもとに地平天動説を正当化するため、可能な限り合理的説明を試みた結果として生み出されたものであり、すでに当時においても各方面から様々な批判が加えられた(17)ものであった。

これに対して八郎は、視実等象論に基づけば、日の出、正中、日の入りで太陽の大きさが変化してみえるはずだと指摘し(18)、改めて「地ノ不動ト云ハ真理ナレドモ、天平地平ハ造理也」だと地球天動説を主張するのである。八郎はここで地平説に関しては自らの生活経験を交えて批判を加えるものの、「地ノ不動」説に関してはなんら言及することなく「真理」であると結論づけている。結局のところ、八郎にとっては地球天動説こそが「真理」という前提が存在しているのであり、それに沿わないものに批判を加えているに過ぎないのである。結論こそ違えど、人間の認識能力を超えた―視実等象論や陰陽説に基づく―「真理」の存在を信じ、演繹的に自説の正当性を主張する点において、介石と八郎の世界認識に対する姿勢は、異なるものではなかったのである。

⑤暦書説

次に挙げられているのは「暦書」である。暦書は農耕生活とも密着しており、民間社会においてもっとも身近な天文説の一つであったといえる。

古人ノ顕シタル暦書其品多シト雖モ、何レモ天地円形ニテ地ヲ中トシテ、日、月、星旋転スト云云アリ。

私ニ曰ク、是真理ナレハ歳世経ルトモ此理消失有ルヘカラズ。然レトモ皆暦道ナレハ、其委細ニ至ツテハ日、月、星ノ大小、高低、旋転遅疾ノ委論而已ニテ、暦家ニアラサレバ楽ミ薄キガ故ニ不記。然レトモ何レモ古書ハ真理ナ。

暦書は古来より様々な種類がある(19)が、それらは委細に至って差異はあれども、地球天動説という点については一致している。これこそが「真理」であり、「此理消失有ルヘカラズ」だと主張される。

これまで見てきた諸説と比べて、なんとも簡潔な言及である。それは自説と一致しているからにほかならない。自説に反する説に対してはその矛盾を糾弾するが、適合するものに関しては無条件に自説の正当性を根拠づけるものとして活用しているのである。ここからも八郎にとって「真理」とは帰納的に導き出されたものではなく、前提として存在した

ものだったことがわかる。

⑥日本書紀説

最後に『日本書紀』に見られる天地開闢説への言及について確認しておきたい。

古人ノ曰、天地未開時、渾々トシテ鶏ノ卵ノ如シ。既ニ気サシヲ含メリ。軽ク光リ有物薄靡テ天ト成リ。重ク濁レル物沈(スム)デ地ト成ル。其中ニ一物アリト云云。

私ニ云。是天動ノ法也。薄靡ハ飛動ノ理ナレバ真理トシテ楽ムナリ。

ここではより明確に「真理」の前提性が見て取れる。『日本書紀』の天地開闢説によれば、天地未開の時に、「軽ク光リ有物」と「重ク濁レル物」が二分化して世界ができた。その際に「軽ク光リ有物」は「薄靡テ天ト成」ったことからも明らかなように、本来、天とは動くことこそが「理」なのであるから天動説こそが「真理」であると言うのである。

ここまで見てきた諸説のなかで八郎が肯定しているのは、②望遠鏡の説、⑤暦書説、⑥日本書紀説である。これらはすでに見たようにすべて陰陽説に基づいた地球天動説であった。この説に適合するものは「楽ミ」という表現をもって肯定され、相反するものは否定された(20)。こうした八郎の主張は、福澤諭吉が「陰陽五行の惑溺」(21)と批判したように牽強付会に映りかねない。

時代背景を考えれば、一八七二（明治五）年の学制発布に伴い、地動説が説かれた福澤諭吉『訓蒙窮理図解』や片山淳吉『物理階梯』が小学校の教科書に用いられている時期である。八郎が同書を執筆した段階において、天動説を唱えることは、決して一般的な行為ではなかった(22)。しかし彼は、決して無知ゆえに天動説を支持するのではない。ここまで見てきたように、キリスト教や西洋天文学をも含む諸説の知識を有しながらも、あくまで世界観としては天動説に固執したのである。

二、八郎の天文観

それでは、なにゆえ彼は頑なに天動説を主張したのであろうか。そもそも人々を啓発する上で、なぜ天文説の「真理」を論じる必要があったのだろうか。その理由の一端を次の記述から窺うことができる。

去レハ世界第一ノ高論ハ天地ノ論ナリ。其真理ヲ知ラザレハ我ガ身体ヲ知ルコト能ハス。故ニ天地辨(辨ス)ニ日、天地ヲ知ラザル者ハ人間ニ似テ人間ニ有ラズト云云。実ナル哉。我身知ラズヲ俗ニ馬廉(廉ス)ト云。釈迦ハ是レヲ地獄ト号ケ、孔子ハ下愚ト曰フ。由テ我天地ノ真理ヲ知ラズンハアラスト天地ノ論多ク見聞スルニ、方便説アリ。惑説アリ。造理アリ。虚説アリテ、始終真理ヲ以テ貫キシハ稀ナリ。故ニ我モ一個小天地ナリ。智学ノ人ノ論説ヲ見聞シテ、其虚実、真造ヲ知ラスンハ有ルベカラズ。

天地の有様を論じることは「世界第一ノ高論」である。この「真理」を知ることがなければ、自らの「身体」についても知ることはできない。「我モ一個小天地」なのである。ところが天文については諸説入り乱れており、そうしたなかには「造理」も多く含まれていて、「真理」を論じたものは稀であるから、諸説を分別しなければならないのだと言う。

ここで八郎が危惧しているのは、人々が民間に流布する「造理」を受容してしまうことで、「一個小天地」としての自覚を喪失してしまうことである。それを阻止しようとする八郎の姿勢は、人間と天地自然が同一原理によって貫かれる、天人唯一思想を護持しようという試みにほかならない。

その思想は以下の部分に詳細に見ることができる。

私ニ云。天地ヲ知ルハ人体ヲ知ルニアリ。人体ヲ知ルニハ陰陽ヲ知ルニアリ。先ツ天ト気ノ差別有ルハ前紙ノ如クナレトモ、皆ヨセテ空ト云。偖又己レ々レガ心体何ノ為メニ生ヲ受ケ、何ガ塊ツテ人体トナリシヤ。是レヲ教ユル者ナキハ、真実ナキニ似タリ。其真理ハ梅辻ノ論ニ明ナレトモ、児女ノ胸中ニ能ク入ラント、二度爰ニ解。人間一体ハ空、風、火、水、地ノ五ツナルハ誰カ見テモ明カニ見ユルナリ。（中略）故ニ我心体ハ空、風、火、水、地ニ相違ナキコト明ラカニ悟ルベシ。此五天地ト区別スル。則ハ空、風、火三ツハ天ニシテ陽ナリ。心魂シル地ノ二ツ、則チ地球ニシテ■■■■身体ナリ。■ヲ以テ之ヲミレバ、我身体（タイ）ト雖、我物ニアラズ。皆天地ノ霊物ニテ天地用達ニ受生シタルモノ也。其御用ハ如何ナル事ゾト云ニ、其身々々ノ業ヲ能励ミ、毒物ヲ退治シテ悪気ヲ縮メ、天地ノ悩ミナキヨウニスルノ用達也。

ここでは一歩進んで、天地と人体を知るためには「陰陽」を知らなければならないと明言する。自分自身の「心」と「体」は何のために、どのようにして生成されたのか。それを教える者がいなければ「真実」はないも同然であると言う。そして「真理」とは、後述する「梅辻ノ論」であり、誰の目にも明らかなように、陰陽説に基づいて「人間一体」が構成されていることである。その意味で人間はみな「天地ノ霊物」であるから、「天地ノ悩ミナキヨウニ」努めなければならない。それは具体的には「其身々々ノ業」に出精することに求められるのである。

だが実際、こうした「真理」を理解し、出精している者は少ない。八郎はつづけて次のように言う。

然ルニ当今ハ世ノ末（マツ）トナツテ欲心ト云、曲者大ニ募リ他ノ悪ヲ縮ルコトハ偖置、天地モ我物ニ為トタガヘニ欲ヲ張リ（ッ）テ主家ヲ奪、人ヲ殺シ、火附、盗賊、虚言偽リテ常トシテ、各々悪気ヲ醸テ天地ノ悩ミヲ仕出ガユヘニ、年々歳々気候悪シク、豊年万作抔夢ニモ見ルコト不能、次第々々ニ万物不豊（ヒカ）シ、人気衰ヘ、終ニハ国ヲ失ウニ至ラント愚老カ患非譬ルニ物ナシト雖、年ハ老タリ。文筆ノ芸ハナシ。何処ヘ云ベキヨウモナク山間ノ一ツ小屋ニテ、独、悪ヲ憎デ日夜口解ヲ聞クモノモナシ。若聞人アラハ、凶作ノ覚悟ヲ教ン。是ハ我心体ヲ知ルノハシ也。

近頃に至っては、「天地モ我物」であるかのように誤解している者が多い。そうした人々が「悪気」を生じさせると、それらは「天地ノ悩ミ」となってしまい、気候の悪化による不作をもたらすことで「国ヲ失ウ」原因ともなってしまうのである。

「悪気」がもたらす被害は一部の悪人だけではなく、社会全体に天災を及ぼすものとして認識されている。彼は天文の「真理」と「造理」を明らかにし、人々に「我心体」が天地と結びついている「真理」を自覚させ、行動の改善を促すことを目的としたのである。

同様の主張は繰り返し行われる。

去レバ昔モ地動ント吐出シタル者アリシガ、其時未ダ日本ノ人気盛ンニテ（マヒ）シテ用ヘザリシガ、今人気大ニ衰ヒ、天地ノ大理ニ至ツテハ真造知リ難ク、亦知ル者アリト雖、億（マヒ）病ナレバ口ヲ開カズ、亦ハ諂（クダカ）ヒ世渡リノ為ニ虚ナルコトヲ辨ヘナガラ是ヲ用ヘ、地動法ガ真理ナリト色々理ヲ加ヘ愚人ヲ惑ス。悲シムヘシ患ウヘシ。如此次第々々ニ人気衰ヘ欲心斗リ募ルガユヘニ、種々様々悪事ヲ巧ミ人ヲ貪ラントスルユヘ、外国ヨリ日本ドロボウ日本バカカメ〳〵ト呼ルヽコト、実ニ恥ケシク又口惜キコトニアラズヤ。其上人気ハ天地ニ通ルモノユヘ、愚悪欲ノ弊気通シテ陰陽ノ悩ミトナリ、遠カラズ遺作（マヒ）凶作アリ。御用心〳〵〳〵〳〵〳〵。

かつても地動説が唱えられたことはあったが、当時は「日本ノ人気盛

ン」だったために、それが普及することはなかった。しかし、現在、「人気」は大いに衰えているために、「天地ノ大理」の「真造」は知りがたくなってしまったのである。

八郎が指摘するように、地動説自体は一八世紀後半にはすでに日本に紹介されていた。これが流入した当時は一部にしか受け容れられなかったにもかかわらず、明治期になって信じる人々が急増したことを、彼は「人気」の衰えが関係していると考えたのである。そして「人気」は天地と通じたものであるから、人々の「愚悪欲」といった「弊気」が「陰陽ノ悩ミ」となってしまうことで、凶作を引き起こす原因となると危惧されているのである。それを阻止するためには人々が「真理」を知る必要があると認識されたのであった。

このように八郎が天文説を説くことは、決して個人の世界観の問題に留まるのでなく、ましてや単に天文知識を周囲に普及させようという意図に基づいているのではない。天地と人間が結びついているという「真理」を人々に自覚させ、行動を改めさせなければ、災いに繋がりかねないという危機感のゆえになされていたのであった。現実の社会状況を変えるために不可欠な喫緊の課題だと認識したからこそ、彼は天文説の啓発を志したのである。

「真造辨」の根底にあるのは天地と人間を貫く「真理」が自身に内在しているという天人唯一思想であった。そうした天地と結びつく確信があるからこそ、天動説は疑いようのない絶対の「真理」であると認識されるのであり、また現実の社会を改善していくためにも、「真理」を人々に周知させていくことが自らの使命であると認識したのである。

ところで本稿の冒頭で述べたように、かつての八郎は東照宮信仰が篤く、その神託ゆえに政治運動に身を投じたのであった。幕末期における彼の行動原理となっていたのは、自らに命令を下す外在する人格神としての東照大神君だった。こうした、自らの行動原理としての超越観念―外在する人格的存在から内在する理法的存在へ―の変化をどう捉えればよいのであろうか。一つには幕府崩壊による東照大神君の地位低下という要因が指摘できよう。しかしそれはすぐさま天人唯一思想への移行を意味しない。彼は陰陽説に基づく世界観を放棄する可能性もなかったわけではないのである。事実、先に見たように、望遠鏡の説の妥当性を観測結果によって根拠づけている点や、佐田介石の視実等象論を自身の観測経験から否定している点からは、不十分ながらも、形而上学的世界観からの跳躍を見て取ることもできよう。そうした可能性を有しながらも、彼はなぜ陰陽説に基づく世界観を「真理」と認識したのであろうか。

三、烏伝神道の天文観とその影響

八郎の著作に陰陽説に関する記述が増加するのは文久期以降である。これは八郎が八丈島へと遠流され、同地で烏伝神道の教祖・梅辻（賀茂）規清（一七九八〈寛政一〇〉～一八六一〈文久元〉）に出会った時期に該当する。

規清は上賀茂神社の社家に生まれ、神道に留まらずひろく国学や朱子学、天文学を修め、知見を深めるため諸国を漫遊し、水戸藩の藤田東湖をはじめ各地の学者と交友した。そうした経験を踏まえて烏伝神道を創唱し、江戸市中において『日本書紀』神代巻について天人唯一思想に基づく講釈を続けたため、新義異流を説いたとして八丈島に遠流され、同地で没した(23)。

八郎が八丈島に到着したのは一八六〇（安政七）年の七月であるから、両者の交流は一年に満たないものである。しかし、規清が八郎に与えた影響は大きく、「真造辨」には次のような記述が見られる。

私云。此梅辻飛騨守ト云人ハ西京ノ産ニテ、智勇信実真ノ学者ニテ世ニモ稀ナル人ナリシカ、時ヲ失ヒ節ニ合ハズ、不幸ニシテ片島ニ命終ス。其レハ何故ト云フニ、旧江戸ニ於テ神代ノ巻方便説ヲ実事ニ顕ハシ講釈シタル故、異説也ト罪ヲ拵ヒ遠流セラレタリ。（中略）偖又智者学者、天地ノ論説多ク聞見ス。然レトモ此ノ梅辻ノ論ノ如ク信実真理ヲ以テ天地開闢ヨリ人体ニ貫キタルハ、末タ見聞セザル故、我一生涯ノ楽ミ是ナリ。

八郎は規清との交流以前においても、陰陽説に関してまったく無知だったわけではなかろう。しかしそれは知識として有しているにすぎず、明確な世界観を構築するまでには至っていなかったのである。それが規清との交流により、「信実真理」が「天地開闢ヨリ人体ニ貫キタル」ことを知りえたのであった。

ここで烏伝神道の特徴を確認しておきたい。時期によってその教説に変容・転回はあるものの、その根本は天人唯一思想として一貫している(24)。それは規清の嘉永期以降の著作である『陰陽外伝磐戸開』に見える次の文章に象徴的である。

夫、天人唯一ハ、天地合一ナレバ也。先人ノ舎ル妙用、則天地ノ雛形ニシテ、数ニ顕ハレタル理ヲ観テモ、銘々ノ身ノ貴キヲ知ルベシ。(25)

人間に宿る「妙用」は、「天地ノ雛形」であるとされる。そうした天人唯一の立場からは、各々の「身ノ貴キ」を自覚するべきだという主張が導かれる。さらに規清は、こうした天地との結びつきは、一部の人間に限られたものではないことを強調する。

人而已心ニ天地ノ妙ヲ具足ス。故ニ、人ノ徳ハ修行練磨シテ天地ノ妙ヲ責誥、空ヲ微塵ニ縮メテ万物万事、天地ニ感ヲ通スル人ヲ聖人トモ神トモ云也。故ニ感ノ人ニハ国人感シ服シテ、無異ニ国家ノ治マルハ感ノ徳也。此ハ万物ノ長。（中略）尊卑ニ拘ハラズ修行熟練ノ上ハ、誰人ニヨラズ天地ノ感応アルハ固リノ義也。(26)

「万物ノ長」である人間のみが、「心ニ天地ノ妙」を備えているのである。それは「修行練磨」することが可能なものなのであって、しかも身分の「尊卑ニ拘」るものではない。つまり八郎のような民衆にも「天地ニ感ヲ通スル」道が開かれていたのであった。

こうした規清の天人唯一思想は、その天文観にも色濃く影響を及ぼしている。

天人唯一ニ基キ其理一貫スル義ニアラザレバ、仮令何状先賢未発ノ説ト雖、人作ハ取ズト云ガ神道窮理ノ一徹也。故ニ證文ノ出後レ地動ヲ西洋人ニ云レテ今更神代ノ説也ト云分ハ不立。依テ西洋人ノ説ナラバ説トスベシ。神道ニ於テハ渠ガ云地動ノ説ハ固リ信ゼズ。糠戸命ノ窮理ノ地動ハ飽迄尊信ヲ為也。其ハ神代ノ巻ニ陽ヲ諾ト云テ静ナル義、陰ヲ冊ト云テ動ク義也。然レバ陽ハ天ニシテ動ズ、陰ハ地ニシテ動ク理、如此和訓ニ著明キヲ知ラズヤ。是取モ直サズ地動ノ義也。故ニ己神代ニ地動ノ説アリト云ハ、此和訓ヲ准拠トスル義ニシテ、何ゾ無キコトヲ有リト云ンヤ。(27)

天人唯一の立場からすれば地動説が「真理」ではありえない。だが「西洋人」によって地動説が流入すると、国学の側では「神代ノ説」、すなわち古代神話を西洋天文学によって合理化しようとする動きが起こった(28)。しかし、それは「陽」を動かないものとして、「陰」を動くものとしているように、「無キコトヲ有リ」としたものだとして、地動説批判を行っているのである。ここからも規清が陰陽説に基づく天動説を支持していたことがわかる。

だが八郎は、こうした規清の天文説をはじめから疑いなく受容したわけではない。文久期の八郎の著作のなかには、規清との天文説に関する

以下のようなやりとりが記されている。

古語ニ後世恐ルベシトアリ実成哉。梅辻ノ解ニ、天地開ケザル以前ヲ玄ト号テ、水火混シテ分レザル也。然ルニ産ト云理ガ火ヲ粛結ルニ、火ハ奇数ナルガ故ニ日輪ノ一ツトナル、又水ヲ粛結ルニ水ハ隅（マヽ）数ナルガユヘニ月ト地球トナルト云云。此理実ニ面白シ。然ルニ爰ニ一ツノフシギアリ。神儒仏ノ三語ヲ聞ニ、星ノ辨計リハ色々怪シキコト而已ナレバ、予星ノコトヲ問ニ、梅辻ハ梅辻丈ノ理ハ附タレトモ、是モヤハリ怪シ。依テ在国ニ聞望遠鏡ノ説ヲ以テ実理ト為。先ツ望遠鏡ヲ以テ天ヲ見ルニ日、月、星、悉皆世界ニシテ、日輪ハ一円火ノ凝タル一ツノ大世界、月星ハ此世界ト異ナルコトナク、剰ヘ月ノ世界ヲ見ルニ、月ノ世界冬の時ハ山々ヘ雪ノ積リショウス 迚（ほど）、アリ〳〵ト見ユルト云云。是最実理也。(29)

八郎は神儒仏、諸説における天文説に疑問を抱いていた。そこで規清に問うも、その解答は「梅辻丈ノ理」であって、十分に納得できなかった。そこで八郎は遠流前に耳にした「望遠鏡ノ説」を「実理」であると考えた。その説によれば「日、月、星、悉皆世界」であって、太陽は火が凝固したものであり、月には地球同様に雪が降るように見えると言う。こうした説は実際の天体観測の結果得られたものなのだから、まさしく「実理」なはずである。文章は次のように続く。

此望遠鏡ト云物、蘭人ノ仕出シタル物ニシテ、近年ノコトナリト云。梅辻在国ノ時分ハイマダ国地ニ流行セズト見ヘテ、梅辻此説ヲ知ラズ。然リト雖、上ミ云水ハ 隅（マヽ） ナレバ月ト地球トナルトノ辞ハスデニ中レリ。世界ト云コトハ知ラズトモ、地球ニ月ヲ一ツニ云所、月モ世界ナリト云ニヒトシ。斯ノ如ク道具ヲ工ミ遥ニ高天ヲ望ミ、其正体ヲ見ル者アレバ、又眼ニ不見トモ実理ヲ新ニ知ル者アリ。実ニ後世恐ルベシトハ此事ナラン歟。神聖仏モ月日星トモ悉ク世界也ト解置レシト云コトハ聞ズ。然ルニ今、新ニ望遠鏡ノ徳ヲ以月星ノ正体ヲ知ルコト、難有コトニ非ズヤ。(30)

しかし、そのように天体観測を元にして得られた「実理」は、結局のところ規清の陰陽説と同様のことを示しているのである。規清は望遠鏡による観測について知識を有していなかったにも関わらず(31)、「理」に基づいて認識した世界観は正しいものだったのである(32)。八郎はこうした規清との交流を経て、陰陽説に基づく世界観こそが「真理」であると認識したのである。

安丸良夫は、「八郎の依拠する普遍的原理は、系譜的には主として儒教に由来する道徳主義的なもの」であり、「主として朱子学的な理の観念に系譜をもち、望遠鏡による観察などの疑似科学を加味したもの」であったと言う(33)。だがここで、天体観測という経験に基づいて「実理」を明らかにしようとする姿勢からは、「理」の観念を前提とするのではなく、むしろ帰納的に世界を理解しようとする八郎の姿勢が読み取れる。その結果導かれる答えが規清の陰陽説と一致したとき、はじめて八郎は前提としての「真理」の存在を認識しえたのである。こうした経験があったからこそ、八郎は地球天動説を絶対の「真理」だと確信できたのである。「真造辨」で見られたような演繹的に導き出される天文説への言及も、彼にとっては経験に基づいた、帰納的な世界認識だったのだとも言えよう。

おわりに

これまでの分析をまとめると以下のようなことが言えるであろう。第一に、八郎は天文学に関心をよせ、西洋天文学、仏教天文学をはじめ諸説に関する知識を有していた。だが彼にとってそれらの多くは「造理」

であり、「真理」とは陰陽説に基づくものでなければならなかった。彼の天文観、ひいては世界観は、形而上学的認識の枠を出るものではなかったのである。

そして第二に、こうした八郎の思想形成は、梅辻規清による影響が大きいことが指摘できる。陰陽説に基づく八郎の天文説は規清に依拠したものであり、それを「真理」とした前提で演繹的に導き出されているものであった。だがそれは当初からではなく、望遠鏡による観測結果と規清の説く陰陽説の天文説が一致したことで、はじめて「真理」だと認識しえたのであった。

末永恵子は、八郎が展開した天動説地動説論争は、「倫理と結びついたいわば近世的な自然認識と近代の客観的自然認識との対決であった」と言う(34)。だが、これまでの考察をもってすれば、八郎にとっての天文観が、二項対立的に表せるものではないことは明らかである。「近世的な自然認識」（＝陰陽説）が、「近代の客観的自然認識」（＝天体観測）と一致したと考えられたゆえにこそ、八郎は天動説を紛れもない「真理」だと信じ、此説の普及に努めたのである。

八郎の明治初期における世界観は陰陽説に基づくという、旧来の天文観に拠るものであった。それは一見、自らの世界観を前提とした演繹的なものであるが、彼は暗愚蒙昧ゆえに陰陽説に依拠したわけではない。観測結果と陰陽説の一致という経験を通して、諸説のなかから、陰陽説に基づく世界観を主体的に選び取ったのである。

「真造辨」の記述からは、概念や知識としての西洋を受容しつつも、根底にある思想や世界観としては、陰陽説に依拠した形而上学的世界観からついに抜け出すことがなかった、一人の人間の葛藤を垣間見ることができよう。

ではこうした八郎の明治初期における思想をどのように位置づければよいであろうか。宮城公子は、客観主義に立脚する個別諸科学の普及によって、儒教が日常道徳に矮小化され儒教的主体―内面性の徹底による天人合一思想―が喪失されることで、人々が他者との一体感や世界の中で自分を位置づけることができなくなったと指摘し、これを「近代的個人」が新しく背負う代償だと言う(35)。これに対し、明治初期においてもなお天人唯一思想に基づく世界観に固執し、人間を天地自然との関係性のなかに位置づけようとした八郎の事例は、「近代的個人」とは異なる経路を辿った、国民国家形成期・自由民権期における民衆の主体形成の一つのかたちであったと言えよう。

註

(1) 八郎の東照宮信仰に基づいた政治運動の展開については、拙稿「幕末維新期における「家」・「個人」意識と超越観念―菅野八郎の士分化運動を事例として―」（『日本思想史研究』四八号、二〇一六年）を参照。

(2) 代表的なものとして、庄司吉之助『近世民衆思想の研究』（校倉書房、一九七九年）、鯨井千佐登「幕末の民衆思想―菅野八郎を事例に―」（宮地正人編『明治維新の人物像』吉川弘文館、二〇〇〇年）、布川清司『近世日本民衆思想史料集』（明石書店、二〇〇〇年）、須田努編『逸脱する百姓―菅野八郎からみる一九世紀の社会―』（東京堂出版、二〇一〇年）などが挙げられる。

(3) 主な研究として、伊東多三郎「近世に於ける科学的宇宙観の発達に対する反動に就いて―特に僧侶の運動に就いて―」（『宗教研究』新一一巻二号、一九三四年）、板澤武雄「江戸時代に於ける地動説の展開と其の反動」（『史学雑誌』五二編一号、一九四一年）、日本学士院編『明治前日本天文学史』（日本学術振興会、一九六〇年）、藤原暹『江戸時代における「科学的自然観」の研究』（富士短期大学出版部、一九六六年）、広瀬秀雄「洋学として

の天文学」（日本思想大系六五『洋学　下』岩波書店、一九七二年）、中山茂『日本の天文学―西洋認識の尖兵―』（岩波書店、一九七二年）、吉田忠「近世における仏教と西洋自然観との出会い」（安丸良夫編『近代化と伝統』春秋社、一九八六年）、渡辺敏夫『近世日本天文学史』（恒星社厚生閣、一九八七年）、荒川紘『日本人の宇宙観―飛鳥から現代まで―』（紀伊國屋書店、二〇〇一年）、井上智勝「幕末維新期の仏教天文学と社会・地域―梵暦運動研究の射程―」（明治維新史学会編『明治維新と文化』吉川弘文館、二〇〇五年）、岡田正彦『忘れられた仏教天文学―十九世紀の日本における仏教世界像―』（ブイツーソリューション、二〇一〇年）など参照。

(4) こうした立場からは、海野一隆（「地球説の大衆化」『日本人の大地像―西洋地球説の受容をめぐって―』大修館書店、二〇〇六年）やポロヴニコヴァ・エレーナ（「大雑書に表現される「世界」観―「須弥山図」と「地底鯰之図」を中心に―」『日本思想史学』四六号、二〇一四年）らが、大雑書や暦書の記述を元に民間社会における天文観について言及している。だが、個々の民衆が実際にそうした知識をいかに受容していたかについての分析は十分ではない。

(5) 末永恵子「烏伝神道と菅野八郎」（『烏伝神道の基礎的研究』岩田書院、二〇〇一年）、佐野智規「鈍愚の潜在力―八郎のテクストにおけるさまざまな力―」（須田前掲書）など参照。また、「夢之浮言」に関しては翻刻（佐藤友治「「真造弁（ママ）　八郎（ママ）信演」について」『福大史学』四六・四七号、一九八九年）が存在する。

(6) 以下、特に断らない限り引用史料は「真造辨　八老信演」（『真造辨　八老信演』）に拠る。なお筆者によって旧字体を新字体に改め、句読点を補った。

(7) 「子孫心得之事」『〔八老十ヵ条〕』福島県歴史資料館、菅野隆雄家文書五。

(8) 月面の「海」とは月表面の暗く見える部分のことを意味しており、実態は玄武岩で覆われた平坦な領域であるが、地球と同様に水が存在するものだと考えられていた。

(9) 庄司吉之助「解説　菅野八郎」日本思想大系五八『民衆運動の思想』（岩波書店、一九七〇年）四五六頁。ただし、ここで庄司が主に対象としているのは文久期の「忠五郎に与えた手紙」の記述である。なおこの史料は本稿で後述する「偖先ツ天地開闢スルト直ニ陰陽備ルベシ」と同一史料である。

(10) 底本には東北大学和算関係文庫所蔵（林―七五七）のものを使用した。

(11) Asa smith, Smith's Illustrated Astronomy, New York:Cady & Burgess, 1849.

(12) 『周礼』秋官・司烜氏には月を特殊な鏡を通すことで「明水」という水が得られるとの記述があり、霊水として祭祀に用いられた。詳細については江川式部「唐朝祭祀における玄酒と明水―『大唐開元礼』の記載とその背景―」（『駿台史学』一一三号、二〇〇一年）参照。

(13) ポロヴニコヴァ前掲論文参照。

(14) 須弥山説に対する批判はすでに一八世紀中頃には確認できる。たとえば富永仲基の『出定後語』に須弥山方便説が見えることが指摘されている（西村玲「須弥山と地球説」『近世仏教論』法蔵館、二〇一八年）。より民間社会に流布したものでいえば、『永暦雑書天文大成』などの大雑書にも須弥山方便説が見える（ポロヴニコヴァ前掲論文）。また、寺島良安（一六五四〈承応三〉～?）の筆による『和漢三才図会』（一七一五〈正徳五〉年）では、巻五六「山類」のなかで須弥山説を寓話的なものだとみなしている。

(15) 詳細については、谷川穣「〈奇人〉佐田介石の近代」（『人文学報』八七号、二〇〇二年）、同「周旋・建白・転宗―佐田介石の政治行動と「近代仏教」―」（明治維新史学会編『明治維新と文化』吉川弘文館、二〇〇五年）、同「仏教天文学を学ぶ人のために―佐田介石と幻の京都「梵暦学校」が意味するもの―」（岩田真美・桐原健真編『カミとホトケの幕末維新―交錯する宗教世界―』法蔵館、二〇一八年）など参照。

(16) 岡田前掲書、二一六～二二二頁。

(17) たとえば『朝野新聞』には演説会や講演の場で、師範学校の学生、「窮理問答一読位の先生」から糾問され、介石が返答に窮した記事（明治一一年六月二二日・明治一二年三月二八日）や、介石を批判する投書（明治一一年九月二一日）が掲載されている。この点に関しては、古畑侑亮氏の教示を受けた。

(18) もっとも視実等象論は、地上からの天体観測では見かけ上の「視象天」を見ているにすぎず、「実象天」を見ることはできないという立場をとっているわけであるから、地上からの観測を根拠とする八郎の批判は妥当とはいえない。

(19) 暦書の系統に関しては林淳『天文方と陰陽道』（山川出版社、二〇〇六年）を参照。

(20) 紙幅の関係上、すべての天文説を掲載できなかったが、ほかにも「天地ハ万世不易ノモノニテ生滅スルコトナシ」とする説や、『天文図解』も引用されており、陰陽説の観点から前者は「虚説」、後者は「真言」と判断されている。

(21) 福澤諭吉『文明論之概略』（『福澤諭吉全集』第四巻、岩波書店、一九五九年）三三頁。

(22) 『文部省第十年報』（文部省、一八八四年）の統計を元にすると、一八八二（明治一五）年における福島県の学齢人員就学率は約五〇・六％である。つまり約半数が学校教育のなかで地動説を学んでいたことになる。

(23) 詳細については、末永『烏伝神道の基礎的研究』参照。

(24) 末永は時期によって烏伝神道の教説は転回したと述べ、主な点として、①そのコスモロジーが天と人体の一致を説くものから、天と心の一致を説く点に重心が推移したこと、②その死生観が死後は無とするものから、神となって現世に関与できるという説に変容したことを指摘している（末永前掲書、七五～九六・一一五～一三五・二一八～二一九頁参照）。なお本稿では八郎への影響に重点を置いているため、八郎と規清の交流があった時期、まさに規清の最晩年の思想的特徴に着目しており、転回前の思想については考察の対象としない。

(25) 「男女舎ル差別之事」『陰陽外伝磐戸開』初編下之巻　理之部（『續神道大系　烏伝神道四』（神道大系編纂会、二〇〇三年）一五頁）。旧字体を新字体に改めた。以下同様。

(26) 「和歌及秀句ヲ以テ雨ヲ降シ或非情ノ草木感ヲ為事」『陰陽外伝磐戸開』三編下之巻　無心之感之部、東北大学図書館狩野文庫、一五四〇―二。

(27) 「星之辨」『陰陽外伝磐戸開』初編下之巻　事之部（『續神道大系　烏伝神道四』六〇～六一頁）。

(28) 中山前掲書、一七〇～一七一頁。

(29) 『偖先ツ天地開闢スルト直ニ陰陽備ルベシ」（『（金原田八郎遠島中書記しの綴）』福島県歴史資料館、庄司家寄託文書一―二四六九）。

(30) 同右。

(31) 規清は遠流以前に大坂で、西洋天文学者の間五郎兵衛（一七八六（天明六）～一八三八（天保九））と交流していることから、彼が望遠鏡について無知だったとする八郎の記述の真偽は定かではない。詳細は末永前掲書、八七頁参照。

(32) 庄司吉之助は、規清が望遠鏡の説を知らなかったことを八郎が批判的に捉えていたと分析している（「菅野八郎」『民衆運動の思想』一一一頁頭注および、「解説　菅野八郎」四五六頁。註9参照）が、これは規清の説と望遠鏡の説が一致している点を考慮しておらず、妥当ではない。

(33) 安丸良夫「解説　民衆運動の思想」『民衆運動の思想』四三〇頁。

(34) 末永前掲書、二〇九頁。

(35) 宮城公子「日本の近代化と儒教的主体」（『幕末期の思想と習俗』ぺりかん

社、二〇〇四年）一九六頁。

【付記】本稿は、日本思想文化史院生報告会２０１８での報告（二〇一八年九月二三日・於東北大学）を元に執筆したものであり、当日ご意見いただいた皆様に御礼申し上げる。また本稿執筆にあたり、伊達市保原歴史資料館の皆様に史料の閲覧をはじめ多大なご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。なお、本稿はＪＳＰＳ科研費 18J10502 による研究成果の一部である。

（一橋大学大学院社会学研究科博士課程後期）